

# 通貨バスケット制



**Q:なぜ通貨バスケット制が注目されているのですか**

A: 中国政府は、本年7月に人民元制度の改革を発表しました。その柱の一つとして、これまで事実上米ドルに固定してきた為替相場制度を見直し、「通貨バスケット」を参考にした「管理フロート制」を採用したため、注目を集めています。

**Q:まず、「通貨バスケット制」とはどのようなものですか**

A: 為替相場制度は、通貨当局があらかじめ発表した公定相場で本国通貨を外国通貨に固定する固定相場制と、外国為替市場における需給により相場が決まる変動相場制に大別されます。「通貨バスケット制」は、固定相場制の一つです。

中国がこれまでそうであったように、多くの固定相場制は、米ドルのような単一通貨に本国通貨を固定するものです。これに対して「通貨バスケット制」では、複数の外国通貨をウエート付けして合成した通貨バスケット(通貨単位)に対して本国通貨が固定されます。

中国の場合、通貨バスケットの構成通貨として、米ドル、ユーロ、円、韓国ウォンが中心となっている他、シンガポール・ドルなどの他のアジア通貨や、英ポンド、カナダ・ドル等が含まれているとみられています。

ただし、中国政府は、通貨バスケットを「参考」にするとしており、通貨バスケットに対して人民元を連動させてはいません。中国が採用した為替制度は、いわゆる「通

貨バスケット制」とは異なるものと考えるべきでしょう。

**Q:では、中国が採用した「通貨バスケット」を参考にした「管理フロート制」とはどのようなものですか**

A: 国際通貨基金(IMF)は、管理フロート制を「通貨当局が、特定の為替レート目標をもたずに、必要に応じて裁量的に為替レートに影響を及ぼそうとする為替制度」と定義しています。先般の人民元改革により、人民元の対米ドル基準レートが約2%切り上がるとともに、日々米ドルに対して0.3%の範囲内での相場変動が認められることになりました。しかし、こうした措置は、「特定の為替レート目標をもたない」管理フロート制とは矛盾しています。

IMFは、加盟国の公式表明ではなく、実態に即して加盟国の為替制度を分類しており、これまで中国は「標準的な固定相場制」と位置付けられてきました(2004年末現在)。人民元の対米ドル相場の変動幅が、これまでのところ、非常に小幅なものにとどまっていることも踏まえると、実態的には、中国は、管理フロート制ではなく、引き続き固定相場制を採っていると考えられます。

**Q:今後、中国は通貨バスケット制を採用するのでしょうか**

A: 通貨バスケット制の利点は、本国通貨価値が、通貨バスケットを構成する外国通貨の加重平均で決まるため、特定の外国通貨が大

きく変動した際に、その影響を緩和できる点にあります。例えば、ドルが円やユーロに対して上昇した場合、中国人民元がドルに連動していれば、人民元も円やユーロに対して同率だけ上昇し、輸出競争力が低下します。しかし、通貨バスケット制であれば、ドルはバスケットの一部にすぎないため、人民元の対円、対ユーロ増価率はより小さなものにとどまります。実際の増価率は、バスケット構成通貨のウエートに依存しますが、仮に貿易相手国との貿易量に応じて構成通貨やそのウエートが設定されていけば、輸出競争力を安定的に保つことができます。このため、東アジア諸国との域内貿易の比重が高い中国の場合、人民元をドルに連動させるよりも、通貨バスケットに連動させた方が、貿易・投資活動の安定化のためには望ましいと考えられます。

中国は、通貨バスケットを為替管理の「参考」にするとしていますが、これまでの人民元相場の動きをみると、通貨バスケットよりも米ドルへの連動度合いが大きいようです。中国が、名実ともに通貨バスケット制の採用に踏み切るのかどうか、今後の為替市場の動きから目が離せません。❏

みずほ総合研究所 政策調査部  
 上席主任研究員 小野有人  
 arito.ono@mizuho-ri.co.jp